
書 評・紹 介

速水融著

『歴史人口学研究 新しい近世日本像』

藤原書店, 2009年, 606p.

本書は日本における歴史人口学のパイオニア、速水融氏がこれまで発表されてきた論文19篇に、書き下ろしの序章・終章を加えてまとめられた600頁を越す大著である。速水氏の歴史人口学といえば、信州諏訪地方を扱った『近世農村の歴史人口学的研究』、濃尾地方を扱った『近世濃尾地方の人口・経済・社会』が代表作として知られてきた。これら前著が、特に良質な史料の得られる2地域を取り上げたモノグラフであり縦に深く掘り下げた研究であるとすれば、本書は全国人口を扱った第Ⅰ部、都市人口を扱った第Ⅱ部、カラフトから屋久島まで各地の農漁村人口を扱った第Ⅲ部、人口史料を扱った第Ⅳ部という4部構成をとることによって横に大きく広げた研究といえるだろう。速水氏の歴史人口学研究の全貌は、前2著と相補うことによって初めて明らかになるのである。

収められた19篇の論文のうち、もっとも早い時期のものは1953年に発表されたものであり、半世紀以上前にさかのぼる。一般に日本における歴史人口学の導入は著者によって1960年代の半ばに行われたというのが常識となっているが、実はそれに先立つ「前史」があったことも知られておいてよい。本書に収録された論文を年代順に読めば、歴史人口学が単なる「輸入学問」ではなく、近世日本経済史研究の中の1つの方法として導入され、さらにその後、どのような学問的発展をたどったのかという研究史も読み取れる。

本書を通読して強く感じたのは、日本の歴史人口学史料（宗門改帳に代表されるミクロ人口史料）が実に多様な性格をもっており、その特性を十分に検討すること（史料批判）がきわめて大きな意味をもつということである。本書第Ⅱ部の都市人口、第Ⅲ部の農漁村人口の分析においては、それぞれ史料の特性に関して多くの紙数が割かれている。また、第Ⅳ部は、もっぱら宗門改帳、人別改帳、さらには明治戸籍といった人口史料の成立と作成過程の分析にあてられた。近年の研究は、コンピュータの利用により大量のデータを短期間に処理することが可能になってきたが、ともすると結果の数字だけ眺めて事足りるといった危険も存在する。本書の1つのメッセージは、数量分析においては史料の性質を十分に吟味することが決定的に重要だという点だろう。

膨大な論文に続く終章「人口・家族構造と経済発展」では、長年の歴史人口学研究にもとづいて、前近代日本には少なくとも三つの人口・家族パターンが存在するという見解が示された。すなわち、直系家族型で早婚の「東北日本」、直系または核家族型で晩婚の「中央日本」、そして直系・核・合同家族が混在し婚外子の多い「西南日本」という3つの地域である。著者は、この3つのタイプの人口パラメーターを使ったシミュレーションを行い、「世帯内生産年齢人口比率」の変動には地域間で大きな違いがあると指摘する。すなわち、近世後期のように寒冷化が進み自然環境が過酷化した東北のような地域では、早婚でありながら子供数を制限することによって生産年齢人口比率を安定させたというのが筆者の仮説である。反対に中央日本では生産年齢人口比率の変動はもっとも大きくなった。この地域の農村は、どこに行っても夥しい「土地売買証文」が残されている。従来、この種の文書は「農民層の分解」という歴史法則を裏づける史料として解釈されることがあったが、筆者はこれを人口学的メカニズムの帰結とする、きわめてユニークな見方を示したのである。

ところで、このような人口・家族パターンの違いは近世にとどまらず、現代においてもなお一定の地域差を残していることは多くの家族人口学者によって指摘されている。このような観点からみると、歴史人口学の成果は、日本経済史・人口史の分野だけではなく、現代人口の研究にとっても重要な意味を持つといえるのではないだろうか。

(浜野 潔/関西大学)